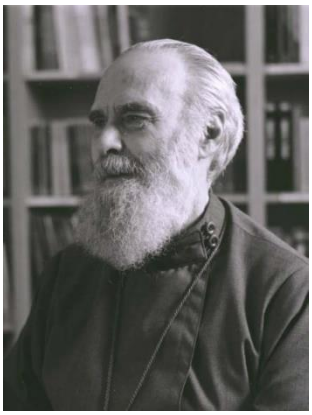

巻頭ページは祈りについてアントニー・ブルーム府主教が書かれた文章です。前号からの続きです。

道央宣教セミ・ブロック機関紙
（札幌・小樽・苫小牧）

会　　報

2023.10.1.　No.401

札幌ハリストス正教会 発行

札幌ハリストス正教会

〒062-0042 札幌市豊平区福住２条２丁目３番１号
TEL:011-852-5644 FAX:011-856-0818
郵便振替 02790-8-4469
http://www.orthodox-jp.com//
E-mail　haris-sp@bz01.plala.or.jp

祈りに奮闘する

・・・自分には祈る価値がない、自分には祈る資格がない、と考えてしまうこともあります。しかし、そう考えてしまうことも誘惑の罠です。例えば水滴を考えてみましょう。水滴はもともと水たまりや、あるいは大きな海だったかもしれません。しかしどんな水滴であっても、またその水滴がもともとどこから来たものであろうとも、蒸発して空中へと立ち昇れば、きれいな水となります。神へと立ち昇っていく祈りも同じです。落ち込んでしまった時ほど、私たちは祈りが必要だと感じます。ある日クロンシュタットのイオアンが感じたのも、やはり祈りが特に必要である、ということだったはずです。彼がある日祈っていた時、悪魔はじっと彼を見つめていました。そして悪魔はつぶやくように言うのです。「お前は偽善者だ。私はお前の考えはお見通しだ。よくもそんな汚い心で、心はそんなことばかり考えているのに祈れるものだ。」イオアンは答えました。「私が今心の中で考えていることに、自分は嫌悪感を抱いているし、そのような考えと格闘している最中である。ただ、それだからこそ私は神に祈っているのだ。」

よく使われるイイススの祈りであれ、他のすでにある祈りであれ、そのような祈りについてよく言われることがあります。その祈りを自分が使ってよいものだろうか。どうしたらその言葉を自分のものとして唱えることができるだろうか、というものです。聖人によって書かれた祈り、祈りに卓越した人々によって書かれた祈りがあります。そのような祈りは、聖人や祈りに精通した人々の体験から生まれた祈りです。そのような祈りを私たちが使っていく中で確信できることがあります。その確信とは、もしその言葉に十分注意を向ければ、その言葉はやがて自分たちのものになるのだ、というものです。そしてその確信にもとづき、私たちはやがて祈りの言葉の根底にある感情に近づいていき、成熟していくことでしょう。祈りの言葉は神の恵みによって私たちを造り変えていくこ

とでしょう。なぜなら神は私たちの努力に応えてくださるお方ですから。イイススの祈りについて考えると、ある意味もっと単純に理解できます。なぜなら、自分の状況が悪くなればなるほど、神の前に立って言えることとは「キリエ・エレイソン」、つまり「主憐れめよ」でしかないことは容易に理解できるからです。

私達は神秘的な照明体験を期待したり、自分に何かが起きることを期待したり、身震いするような体験が起きることをよく期待します。それも期待することが許容される頻度を超えて、期待してしまうものです。しかしそれは間違いです。そのような間違いを、私たちは他人との関係においても犯してしまいます。そしてそれが原因で、人との関係性をことごとく壊してしまうこともあります。人と接する時、私たちは特定の反応を期待してしまうものです。そして全く反応がなかったり、自分の期待している反応ではないと、がっかりしてしまったり、ある特定の反応が返ってきたという事実から目を逸らします。私たちが祈る時、忘れてはいけないことがあります。それは、人が神のもとに来るのを、神はその人の意思に任せますが、その神もまた私たちとの関係において、自由な意思を持っていらっしゃる、ということです。だからと言って、神の自由意思は私たちのように恣意的なものではありません。私たちは自分の感情次第で、人にやさしくしたり、厳しく接したりもします。神の自由意思はこのようなものではありません。だからと言って、私たちが神のもとに来たから、あるいは神の方を見ているからという理由だけで、神はそのお姿を私たちに現わさなければいけないという義務が神の側に生じる訳でもありません。神と人の関係において、お互いのもとに来るにしても、そこから去るにしても、どちらにしても神にも人にも双方に自由な意思があります。それは忘れてはいけません。自由意思は大変重要です。なぜなら、本当の人格的な関係性とは、この自由意思の上に成り立つからです。

かつてこのような若い女性がおりました。彼女は祈りの生活を通して、神が非常に親しく近い存在であると感じていました。ところが突然、神と触れ合えなくなってしまいました。しかし、彼女は神を見失ってしまった悲しみよりも、それ以上にある恐れを抱きました。それは神の不在をごまかすために、代わりに神のまやかしの存在を自分でつくり出してしまわないかという恐れです。彼女がなぜこのような恐れを抱いたのかというと、神の臨在も不在も共に大切なことを教えてくれるからです。神がそばにいらっしゃるにしろ、そうでないにしろ、神のありありとした臨在と不在は、そもそも神が実在するということ、そして祈りの中でもたらされる神と私たちとの関係が抽象的なものではなく具体的なものである、ということを証する最良の証拠となるのです。

そのため、私たちは神に祈りを献げられるよう心を整え、神がどのようなことを与えてくれるにしても、それを受け入れる心ができていなければいけません。神に邁進する生活の基本とはこのようなものです。私たちは神の方向へ向かっていく闘い、自分の中にある不明瞭なもの、神の方を見ることを妨げるものと立ち向かう闘いの中にいます。そのような闘いの中にあって、全く能動的であることもできませんし、全く受動的であることもできません。まず、私たちは能動的であることはできません。なぜなら、自分を奮い立たせたり、自分の努力だけでは、私たちは自分で天に昇っていくことはできませんし、神を天から引きずり下ろすこともできないからです。しかし、私たちはただ受動的になり、何もしないでいることもできません。なぜなら神は私たちを客体、単なる対象として扱うことはないからです。もし私たちが神から影響を受けているだけであるとすれば、そこに真の関係性はありません。霊的な向上を目指す姿勢とは、寝ずの番をするようなもの

です。寝ずの番をする兵士は、夜中にできるだけ静かに、できるだけ注意深く立っています。自分の周りに起こることは、どのようなことであろうとできるだけ意識します。そして起こり得るどのようなことに対しても、的確にすばやく反応する準備を整えています。ある意味、この兵士は能動的とは言えません。なぜなら彼は立っているだけで何もしていないからです。また一方で、彼は非常に能動的であるとも言えます。なぜなら周りの状況に注意を向け、完全に心を落ち着かせているからです。この兵士は耳と目を活用し、知覚を研ぎ澄ませ、どんなことが起ころうともそれに備えているのです。

内なる生き方、自分の魂を見つめる霊的な生き方 inner life においても全く同じことが言えます。私たちは完全な沈黙の中で、冷静さの中で、注意深く、かき乱されることなく、神の前に立たなければいけません。私たちは何時間も、あるいはもっと長い期間にわたって待ち続けるかもしれません。しかし注意深くいることが報いられる時がやがて来ます。なぜなら、やがては何かが起きるだろうからです。もし、ここで再び注意深く用心深くあろうとすれば、私たちは自分の身に起こることはどのようなことであっても待ち構えていれられるようになります。もはや特定のことを期待するのではありません。神から贈られる体験は、どのようなものであろうとも、それを受け入れる覚悟がなければいけません。しばらくの間祈ったことによって心の暖かさが感じられたならば、私たちはいとも簡単に誘惑に陥ってしまいます。それはあくる日、同じことが再び起こるだろうということを期待して、神のもとに来てしまう、という誘惑です。過去に心の暖かさを感じて、あるいは涙を流して、あるいは悔い改めて、喜びをもって祈ったことがあるなら、過去に経験したその体験を求めて神のもとに来てしまいます。そしてあまりにも頻繁に過去の体験を求めるあまり、私たちは新たな神との触れ合いを逃してしまっているのです。

神が私たちのもとにいらっしゃるとき、それは様々な在り方をとることを見出すでしょう。喜びかもしれませんし、恐れかもしませんし、悔い改めや他のかたちをとるかもしれません。忘れてはいけないことがあります。それは、今日これから私たちが感じ取ることになるものは、私たちにとって未知のものである、ということです。私たちが昨日知ったお方としての神は、明日私たちの前に現われるお方としての神ではないのです。（終わり）

臨時公会

9月28日(木)、東京ニコライ堂にて臨時公会が開かれ、札幌管轄から後藤神父、パルメン傳法執事長が出席しました。仙台のセラフィム大主教座下が日本正教会の首座主教に全会一致で選出され、10月22日(日)に着座式がニコライ堂にて行われることが発表されました。新たに府主教になられるセラフィム座下から「日本教会の維持に努めたい」というお言葉をいただきました。（エフレム）

永眠

ナタリヤ　酒井　修子姉（55歳）

札幌教会

ウェラ加來敦子姉のご息女であられ、ご自宅で闘病されていたナタリヤ姉が9日(土)永眠され、札幌教会の聖堂で11日(月)に通夜パニヒダ、12日(火)に埋葬式が執り行われました。ナタリヤ姉の霊の永遠の安息をお祈り致します。

永遠の記憶

北海道ブロック聖歌リーダー研修会

9月9日（土）、10日（日）の日程で、釧路、函館、上磯、小樽、札幌の各教会神品および聖歌リーダーが札幌教会に集まられて標記研修会が開催されました。

今年度の研修目的①【聖体礼儀についての理解を深める】講義は初日、内田神父様から「奉神礼神学とは」の資料により〝礼拝の構造〟および〝教会生活におけるその重要性〟を分かりやすく解説していただきました。

（この資料はとても参考になる内容ですので興味のある方は後藤神父または聖歌リーダーまでお申し出のうえ是非ご一読ください）

2日目は「祈祷の構造について」の資料により〝聖体礼儀の成り立ちや仕組み〟に関して少し難度の高い内容ではありましたが詳しく講義していただきました。

研修目的②【リーダー自身のスキルアップを目指す】実技講習では初日、参加者を2グループに分けて、講師二人が指導する別々の新たな聖歌を入れ替わりで練習しました。

前晩祈祷は祈祷を3パートに分けて札幌の聖歌奉仕者も加えた3グループで、指揮も3人のリーダーで分担して奉仕しました。

2日目の聖体礼儀も3パートに分けて前晩祈祷と同様に奉仕を行ないました。研修の最後に次回の開催方法、釧路で開催の聖歌研修会で取り組みたいことなど討議が行なわれ、今回の研修のまとめがあってすべての日程を終了しました。

※2日目の講義終了後、研修会場の床カー

ペット張替え工事準備のために参加者の皆様で会議テーブルをステージ上へ移動するお手伝いをしていただきました。お疲れのところ本当にありがとうございました。

（パルメン　傳法　肇）

婦人会だより

【絨毯張り替え】

信徒会館の２階の絨毯の張り替えが済み、綺麗になりました。

【婦人会総会】

10月29日（日）聖体礼儀のあと婦人総会を開きます。多数の参加よろしくお願いします。

【清掃奉仕日】

9月6日清掃奉仕日に8名お手伝い頂き、前庭の草取りや信徒会館の蔦の根元を切るなどの作業をしました。奉仕頂きありがとうございます。

【はぎの会】

9月20日には4年ぶりにはぎの会を開催し、8名の方に来て頂きました。モレーベンの後昼食を頂きながら、それぞれの近況を報告し、青山兄の伴奏で懐かしい歌を歌い、招待客自らのフラダンスもあり、なごやかなひとときを過ごしてもらいました。当日、白岩明子姉から差し入れがありました。ありがとうございます。

（パラスケワ　中野　良恵）